



## 言語現象雑考 (6)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-11-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下村, 武 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00007878">https://doi.org/10.24729/00007878</a>

## 言語現象雑考 (VI)

下 村 武 \*

Notes on Linguistic Phenomena (VI)

SHIMOMURA Takeshi \*

### ABSTRACT

This paper deals with two linguistic topics; the first is the polite expressions in English and the second is the honorific titles in English letters, both compared with those of Japanese.

Key Words: English, polite expressions, honorific title

### 1. はじめに

今回は、英語における待遇表現をめぐって、1) 敬語法としての仮定法(叙想法)、2) 敬称の問題を採りあげる。

### 2. 英語における敬語表現としての仮定法

古いことになるが、筆者が学校で英語教育を受けた期間は、10年以上にもわたるが、その間に教わった英語の大きな特徴の中に、英語は日本語に比べて合理的であり、また英語の表現は一般にストレートであって日本語の敬語に相当するようなものはない、などがあげられる。前者は大いに議論の要するところであるが、それは別の機会に譲るとして、ここでは後者を論じてみたい。この問題は、多くの教科書・参考書でもそのように扱われているので、筆者が“敬語表現としての英文”を習った経験がないというのは、ごく普通であろうと思う。

この問題を論ずるに当たって、まず日本語における敬語の概念から考えてみることにする。国語学会編「国語学辞典」によれば、敬語について次のように定義されている。即ち、「同一の対象または同類の対象表現が話し手・聞き手および第三者の間の尊卑・優劣・親疎の関係によって、その形を異にする言語習慣。ことに敬意を含めた言語表現。」とあり、また敬語の種類には、敬意表現の方向から、1) 尊敬語(敬称・尊称) 2) 謙譲語、

3) 丁寧語、があげられている。そして敬語は言語の形態や構成の諸面に現れるとして、1) 文法、2) 語彙、3) 修辞、などをあげている。

さて、そもそも言葉がコミュニケーションの手段であり、コミュニケーションは感情や行動の駆動力の源泉であることを考えると、日本語の敬語が目的としているものに相当した表現が文化的に発達した英語の中に存在しないとするのは不自然である。つまり、話者が相手に好感を抱かせ、よい関係を保つ、あるいはまた、それをもとに相手をして話者の志向する行動をとらせるための表現がないとは考えにくい。筆者の場合、具体的には信書による海外交渉などにおいて、この目的のために努めて用いたものは、主に“仮定法由来の慣用表現”であるが、それはまた海外滞在中にも、はなはだ有効であることが判った。経験からすれば、英語においても、ほぼ同じ内容を表わす表現が幾段階にも存在するが、話し手は、相手の年齢や身分・地位と自分のそれとの関係においてこれらの表現を十分使いわける必要がある。その様相は日本語の場合と必ずしも同じではないが、共通する場合も少くないので、これを“英語の敬語表現”としての確に位置づけることは、われわれ日本人のアプローチを容易にするばかりでなく、これからの“発信型”の時代の英語教育として、とりわけ有効であろうと思われる。

英語の敬語表現をこのように見立てた場合、英語においても、日本語の場合と同様、敬意の表現法は種々考えられる。即ち、1) sir, madam, please などの語を文に付加する方法、2) 用語を変える方法、等々があるが、中でも丁寧さ及び応用範囲からみて最も有用なのは仮定法に由来する慣用表現である。そこで以下、この点

1990年4月9日受理

\*電気工学科(Department of Electrical Engineering)

に注目して英語の敬語法の源泉として仮定法を考察して行きたい。

さて、対話において敬語が最も必要とされる事態は、話者の意向に従って相手に行動させる場合であろう。今ごく1例をあげると、

- a. Speak a little louder.
- b. Please speak a little louder.
- c. Will you please speak a little louder?
- d. Would you please speak a little louder?

ここには、代表的な4段階をあげてみたが、変形はいくつもありうる。b. は please を文尾としてもよいことは言うまでもないが、ほかに Do you mind ~ ing? を用いる方法、それも Do でなく Would を使う方法、c. で please の代わりに kindly を用いる場合など、さまざま考えられる。d. でも Would の代わりに Could を用いると、さらに丁寧とされる。この例の場合、表現が a から d に移るにつれて命令から依頼・要請へと変わっていくが、話者の意向を相手にさせようとしていることには変りない。そして、d に近いほど丁寧さは増すが、これらのうちのどの表現を用いるかは、話し相手と自分との相対関係によって決まる。この点は日本語での場面と大差はない。そして、最も丁寧さの高い位置に仮定法由来の表現があることに注目したい。

なお、上例では命令文から出発したが、話し手の願望の形で表現する場合もある。例えば、

- a. I want you to do this for me.

に対して、I want の代わりに、b. I wish, c. I should like, あるいは d. I would like などが考えられるが、この場合もやはり c. や d. とした仮定法に由来する慣用表現が重要な位置を占める（もちろん、場面によっては、前の例における c. や d. を用いる方がよりふさわしい場合もあるが）。

次に、いくつかの代表的な英語参考書について、これらの仮定法由来の慣用表現の位置づけがどのような取扱いになっているか調べてみる。

まず学生用参考書として、例えば、木村著『英文法精解』では、仮定法に約25ページを充て、そのうち約2ページを割いて、“条件節が全く省略される慣用法”として、

- a) I should think (say) ~ .  
One would think ~ .  
It would seem ~ .
- b) I should like to ~ .  
Would you like to ~ .
- c) I would like to ~ .  
I would rather ~ than ~ .

- d) I would advise you ~ .
- e) Would you ~ ?
- f) Might I ask you ~ ?  
Could you ~ ?
- g) You had better ~ .  
You had best ~ .

があげられ、比較的详细な扱いをしているが、これを敬語と位置づけてはいない。

また筆者が昔学んだ古典的文法書、山崎著『新自修英文典』では、仮定法に約20ページを充当し、そのうち“条件が全然省略された場合”として、やはり約2ページにわたって、

- a) I should like ~ .
- b) I should think (or say) ~ .
- c) I would seem ~ .
- d) Would you ~ ?
- e) I would advise you ~ .
- f) I would rather ~ .
- g) You had better (best) ~ .

を扱っているが、敬語法とみなしていないことは、前書同然である。

また、本格的な英文法研究書とされる斉藤著『英文法研究』シリーズでも『助動詞用法詳解』の巻において約3ページを割いて

- a) I should think ~ .  
One would think ~ .
- b) It would (should) seem ~ .
- c) Who would have thought it ?
- d) I should like ~ .  
You would like ~ .  
He would like ~ .
- e) Would you (please) ~ ?  
Could you ~ ?  
Might I ?
- f) I would ~ .

などを扱っているが、意味を柔げる形の表現としているのみである。このシリーズでは『叙法・時制詳解』の巻でも、仮想法と条件法、の章において“前提の省略”の項で再出するが、用例の取扱いとほぼ同様である。

以上は、古典的な文法書の場合である。そこで、次に比較的新しいものとして、講座『学校英文法の基礎』から、大江著『動詞(Ⅲ)』をみるとどうか。この書では、仮定法の章では殆ど取扱われず、助動詞の章で、過去形の特別な用法として約9ページを割き、“婉曲用法”のタイトルの下に、問題の仮定法由来の慣用表現をやや詳細に解説しているが、これを対話における待遇表現の基本

に据えようとする姿勢はここでも見られない。

それでは、これらの慣用表現は、実際にはどの程度使われているのであろうか。ごく初歩的な英会話のテキストの1例として、田崎著『海外旅行 英会話の公式』をとり上げてみる。本書には、正・続の両編があるが、いずれにも末尾に基本表現集なる付録がついており、ともに173の文例が収められている。これらの中には、a) 単に please を付加した命令文、b) Will や May に始まる疑問文により相手の意志を尋ねるなど、さまざまな丁寧表現もあるが、筆者がここで敬語表現として採り上げている仮定法由来の慣用表現が正編で25%強、続編で約20%を占める。したがって、これに a), b) などを加えると、丁寧表現は相当な割合に上ることに注目する必要がある。

このような事情は、日本語の場合も同様で、一般に「です・ます」体は丁寧語といわれるが、実際の日常会話では、これがごく普通の表現である。しかし、学生たちの中には、この丁寧語（敬語）という用語に眩惑されて、「です・ます」体を十分に習熟しないまま社会に出でしまい、実社会で困るものも少なくない。

これに対して海外における日本語教育では逆の現象も見られる。筆者は数年前、米国インディアナ大学留学中に同学の日本語コースを見学したことがある。ここでは、日本語の談話でごく普通の「です・ます」体から入門する。これも一長一短で、日本の学生とは逆に、文中で「です・ます」を省くと乱暴な表現になると思い込み抵抗を示す者が少ないとのことであった。

この問題は、いずれの場合も、日本語の動詞の終止形あるいは連体形が英語でいう不定法に相当し、時制・待遇は文または節の末尾の語によって決定されることを十分修得させることがポイントであろう。

日英両語の丁寧語の問題は、上記の日本語教育の局面を含め、何を普通と考えるかという基準の問題でもあるが、要は親子・友人等の特別親しい関係にある場合と、そうでない一般の場合とに大別すると、両国語とも後者の場合には、丁寧語が普通の談話体になることは共通している。その意味において、ここで提起した仮定法由来の慣用的丁寧表現は、談話体における重要表現として明確に位置づける必要があるように思われる。

### 3. 信書と敬称

つぎに、敬語に関連して信書とその敬称について論じる。手紙は概ね1対1の通信であるから、そこに用いられる文体も会話体に極めて近く、また発信人の意向に沿って受取人である相手に感情あるいは行動を起させよう

とする目的をもつのが普通であるから、文章形態も会話体に準じて敬語に相当する表現が多く用いられるのは必然である。したがって、2で論じた仮定法より由来した慣用的丁寧表現がここでも肝要となる。

信書において、いま一つ重要なのは、受取人である相手に対する敬称の問題である。これは封筒の宛名および本文において必要となるが、敬称が敬語の一部をなすことは、すでに『国語学辞典』を引用して前記した通りである。

敬称に関して注意すべきことは、ヨーロッパでは一般に敬称に対する感覚がはなはだ厳格で、敬称を誤ると返信をもらえないのが普通だということである。これはヨーロッパの社会が古い伝統から来る階級社会であることを反映している。新興国のアメリカはヨーロッパに比べると未成熟の社会であるが、ヨーロッパ文化を基としているので、この点は余り変らない。それに比べると日本は、はるかに平等な国である。いずれにしても、心して相手にふさわしい敬称をつけることが肝要である。

いま英文信書において用いられる敬称の主なものを列挙すると、

1. The Queen's Most Gracious Majesty : 英国女王
2. The Most Noble Highness Prince ~ : 皇子
3. The Right Honorable Lord ~ : 貴族
4. The Prime Minister : 総理大臣
5. The President : アメリカ大統領
6. The Honorable ~ : 國務長官, 上・下院議員, 大公使, 州知事, 市長など
7. His Eminence ~ Cardinal ~ : 大司教
8. The Reverend ~ : 牧師, 僧侶
9. Professor : 大学等教授職
10. Doctor : 学位所持者
11. General, Admiral, Captain : 軍人
12. Esquire : 弁護士, 検事, 著名人
13. Mr., Miss, Mrs. Ms. (説明は省略)
14. Messrs. : 連名者, 会社・商店など

等々がある。そして、これらの敬称の間で重ねてはいけないものや、場合によって重ねなければならぬものなど複雑で、かつ上記のように種類も多いが、敬称は手紙における敬語のキーポイントであるから、社会に出るまでに誤らずに使えるよう習熟させておく必要がある。

一方、日本語においても手紙の相手に対する敬称は、幾通りもある。いま、それらのいくつかを列挙してみると、

陛下, 殿下, 閣下, 猊下, 先生, 様, 大兄(学兄, 賢

兄，雅兄，兄），殿，君，各位，御中，等々があげられる。日本語の敬称は重ねないのが普通である。これらを相手に応じて正しく使い分けるべきものであるが，最近では敬語が最も発達しているといわれる日本語にしては随分あいまいに使用されている傾向がみられる。その原因は一体何であろうか，先述のように，日本社会が欧米よりはるかに平等な社会であることの反映もあろうが，いま一つは手紙の書式に対する知識が十分行きわたっていないということもあるのではなからうか。この点で手がかりを与えるべき参考書類が内容にのみに偏り，形式をなおざりにしているものが多いのも問題であろう。

聞くところによれば，社会人として会社に就職して最初の難問は手紙を書かされることだという。大学卒でもそうらしいが，義務教育を終えるまでに実用国語の教材として信書の形式を十分訓練させておく必要がありはしないであろうか。ここで論じた敬称の問題もその一部に属する。義務教育における英文手紙の扱いに比べると，母国語である日本語の信書に対する習熟度がいささか気になるところである。

#### 4. むすび

今回は，英語における敬語表現の一端を日本語のそれとの関わりにおいて採り上げた。これらの表現は，グローバルな時代を迎えて，受信型から発信型への転換を目

ざす我々日本人の英語知識として，会話体や手紙において極めて有用な諸表現である。そして，このような転換は，言語の中でより本質的なものは音声言語であるという事実にも合致するが，発信型の時代は同時に創造の時代であることを考えると，高度な英文を読み，かつそれに見あう文章を書く能力の必要性は，一向に減少していないことにも留意することが肝要である。このような事情を考えると，ハイレベルの機械翻訳や電子通訳機の出現が期待される。

#### 文 献

- 1) 国語学会編：国語学辞典，東京堂（昭47）
- 2) 木村：英文法精解，培風館（昭45）
- 3) 山崎：新自修英文典，研究社（昭28）
- 4) 齊藤：英文法研究，助動詞用法詳解，吾妻書房（昭28）
- 5) 同上：英文法研究，叙法・時制詳解，吾妻書房（昭34）
- 6) 大江：講座学校英文法の基礎，第5巻，動詞(Ⅲ) 研究社（昭58）
- 7) 田崎：海外旅行・英会話の公式，正編・続編，ジャパンタイムズ（昭55）
- 8) 増田：新和英大辞典，研究社（昭57）